

週刊

教育資料

2018年3月5日号

No.1468

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION

<http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>

>>> 好評連載

- 校長講話【教員の休暇や部活動の理解を】岩瀬正司／(公財)全国修学旅行研究協会理事長
- 教育問題法律相談【子どもの労働に対する規制】澤田稔／弁護士
- 特別企画【小学校外国語指導で教員採用方法はどう変わる?】



- ▼資料【高等学校学習指導要領の改訂(案)のポイント・下】
◎文部科学省
- ▼マイオピニオン【日本人とマスク】
◎平野啓子／語り部・かたりすと
- ▼危機管理【レガシーとして残すオリンピック・パラリンピック教育】
◎佐藤正志／白梅学園大学元教授
- ▼潮流【何度でもやり直せる社会に】
◎安田祐輔／特定非営利活動法人キズキ理事長

安田祐輔

やすだ・ゆうすけ◎1983年神奈川県生まれ。国際基督教大学(ICU)教養学部国際関係学科卒。大学卒業後、総合商社勤務を経てキズキを立ち上げ、現在同代表を務める。中退・不登校経験者向けの受験塾、大手専門学校約6校での学習センター運営に加え、高校・専門学校を中心とした教職員研修、新宿区での就労支援事業、ベトナムでの海外インターンシップ事業など様々なアプローチで若者の後押しをしている。



安田祐輔氏に聞く

特定非営利活動法人キズキ理事長

潮流◆題字奥野誠亮

潮流

何度でもやり直せる社会に

不登校や高校中退、ひきこもりの若者を
個別指導で学習の支援をしたり、
大学や専門学校とともに学生中退を予防し、
何度でもやり直せる社会を目指してきた。

挫折経験のある若者の学び直しを支援

——「キズキ共育塾」は、どういうミッションで、どのような活動をされていますか。
私たちの「キズキ共育塾」にやってくる子供・若者の8割程度が、不登校や高校中退、ひきこもりなどを経験しています。残りの2割は高校に在学しているが、大学受験などが難しい状況にある生徒たちです。いずれも普通の学習塾や予備校には通いづらいと感じており、その子供にあった個別指導が必要です。このほか、社会人であっても、不登校や中学・高校時代に勉強が十分にできなかった人などがあります。
年齢的には18〜20歳が多いのが特徴です。また、平均して「ひきこもり」を3年ほど経験しており、人とコミュニケーションするのが苦手な人が多いです。このように、さまざまな理由で学校や既存の大手塾で「挫折」した経験のある若者たちを対象にしています。「もう一度勉強して、人生を切り拓いていきたい」という思いを持っている人のための「学び直し」をサポートする個別指導塾として、小学生の内容から難関大学の受験レベルまで、幅広い学習のニーズに応えてきました。

——「キズキ」という名前にはどういう意味を込めているのですか。

自分の可能性に「気付き」、自分の将来を「築く」という二つの意味を込めています。一度、挫折してしまっただとしても、「何度でもやり直すことのできる社会」を目指して、若者の学び直しを全力でサポートしていきこうという決意を込めたものです。

——NPO法人とは別に、(株)キズキを設立して、高等教育機関の研修サポートや中退防止などのコンサルティングなどもされています。

中学校や高校の時に不登校だったり、既存の学習塾や予備校になじめなかった生徒が大学や専門学校などの受験を目指す場合、受け入れ側の大学や専門学校も最近では、18歳人口の減少などもあって、学生確保のために、不登校経験などがあっても受け入れようとする動きが広がっています。例えば、入試などで「合理的な配慮」をするだけではなく、入学後も学習支援や相談体制などを充実させて、中退を予防し、社会人として就労できる学生を送り出していくことに力を入れ始めています。

私たちが、複数の大学や専門学校と提携しながら、これまでの学習支援や個別指導

のノウハウや知見を生かして、講師の派遣や教職員向けの研修支援、コンサルティングや調査活動などを実施しています。中には、私たちの社員が常駐して、学習支援センターなどで学習や人付き合いなど生活面で困難を抱えている学生を日常的に支援できる体制を取っているケースもあります。

子供に合わせて先生を付ける

——色々な課題を抱えている子供に個別指導で対応する時に留意していることは。

現在、五つの校舎で約120人のスタッフが個別指導に当たっていますが、最初やってくる子供や保護者との面接などを通して、各教室の担当者が「この子供にはこのスタッフが合いそうだ」と、子供に合わせて個別指導する人を決めていきます。教職免許まで取得している人はほとんどいませんが、心理関係の勉強をしっかりともらって、一人ひとりの生徒の状況を最初によく理解して、対応するようにしています。

不登校やひきこもりを経験している生徒が多いのですが、例えば、不登校を経験した生徒の場合、発達障害などがその要因となっているケースはそれほど多くないように感じています。もちろん、そうした背景

があるケースもありますが、学校で先生との関係がこじれて不登校になったり、親や友人との関係に疲れてしまってひきこもるといふ生徒が多いです。ですから、キズキ共育塾で個別指導をする場合に、一人ひとりの子供との信頼関係を築くことが、その後の本人の勉強への意欲を高めるために大切なポイントになっています。

——具体的な対応などで大切にしていることは何ですか。

まず、受容的な態度で対応することが大切です。例えば、本人が「学校には行きたくない」と言っているのに、「いや、学校って楽しいよ」と、自分の思いをぶつけるのはダメです。学校の先生というのとはもともと学校が好きでしょうから、「学校が嫌いだ」という生徒の思いにはなかなか同意できずに、「なぜ、学校が嫌いなのか？」などと質問したり、反論したりしがちです。この「受容的な態度」が苦手な先生が多いと感じています。ですから、私たちのスタッフは、心理やカウンセリングなどの勉強をして受容的な態度で生徒に接することを重視しています。

実は、「キズキ共育塾」に通ってくる生徒は、学校の勉強から「落ちこぼれて」しまったわけではなく、もともと知的な遅れ

などもないけれど、人間関係などのトラブルがいやで不登校になったケースが多いのです。ですから、個別指導を通して大学受験などに前向きに取り組み始めると、成績も大きく伸びて、有名大学などに進学していくケースも出ています。

——「キズキ共育塾」での活動を通して、今の学校制度についてどうお考えですか。

社会人になれば、自由に職業を選ぶことができますが、日本の場合、特に義務教育の段階では、入学する学校が決まっています、自分に合った学校を選ぶという選択肢はほとんどありません。例えば、アメリカなどでは、公立の学校に通わなくても、ホームスクールなどの学習形態が公的にも認められています。これは学校だけの問題ではないかもしませんが、日本の場合、さまざまな場面で「この道しか選択肢がない」という「一本道」の社会の状況が多いのではないかと感じています。場合によっては、別の学校を選んでも良いし、そもそも「学校」以外の学ぶ場の選択肢があってもよいのではないかと思っています。

また、長い人生ですから、一度や二度の失敗で選択する道が閉ざされるといってではなく、学校も職業も自分で主体的に選択でき、やり直しができるという社会であっ

てほしいと願っています。そのためには、学校教育の中でも「自分に合った選択肢ができる力」を育成していくことが大切ではないかと思っています。

若い人に選択肢の情報を届ける

——(株)キズキの経営をされている立場から、力を入れていることは。

やり直しをしたいと考えている若い人が「自分もやってみたい」という選択肢としてアピールするために、ホームページ上でデザインや内容には力を入れてきました。例えば、今の若い人はスマートフォンなどで、いつでもどこでも、調べたいことが検索できますので、「不登校」「塾」「ひきこもり」「勉強」などで検索すると、結果の上位に出るように研究したり、「自分も通ってみたい」と思ってもらえるような元気がでる文章や情報の提示などを工夫してきました。

会社組織にすると、無駄を省くための努力も重ねる必要があります。こうした一つ一つの努力の結果、300人近い生徒のうち、進路を決定して卒業していく人が9割近くに上るといふ実績を出せるようになりました。

今、ひきこもりの高齢化などが課題にな

っていますが、それは「やり直しができる」場などの情報が本人に届いていないからではないでしょうか。私自身は、個別指導などで学習支援をすること以上に、こうした情報を必要とする人に届けることが大切だと思っています。

——学校関係者にひと言。

東京都の渋谷区で就学援助世帯の子供が学習塾などで使える「スタディ・クーポン」の制度に私たちも参加しています。ところが、こうしたクーポンを必要とする子供に届けるためには、そのための情報を持っている福祉関係や学校の先生方との連携が必要になってきます。こうした試みは、最終的には困難を抱えている子供にとって有益な活動ですので、同じ目的のために学校と地域の民間の団体などで連携・協力し合える部分があるように思います。

学校の現状を見ると、40人近い子供たち一人ひとりに丁寧に接するのは物理的に無理だと思っています。子供の幸せのために、地域の民間団体と連携して、困難を抱える子供のための勉強会を一緒に行うなどの試みが広がっていくことを期待したいと思います。

特定非営利活動法人キズキ <https://kizuki.or.jp/>